

アメリカの有権者教育 レポート〈第1回〉

投票率向上の第一歩は、 子どもの頃からの教育

投票率の低下が選挙のたびに問題になっています。その要因の一つは、「誰に投票していいかわからない」といったような、「投票できない」層の存在を挙げることができません。何故、投票できないのか。それはとりもなおさず、投票を決める判断の技術を知らないからといえます。日本政治の問題の根底は、有権者に対する判断力の訓練がなされていないことにあるのではないのでしょうか。

これに対しアメリカでは、子どもの頃から子どもたちの目線で疑問や好奇心に応え、徹底的に自分の意見を決める判断力の訓練がなされています。アメリカの強さは、判断力を磨くこの地道な有権者教育の上に成り立っているといっても過言ではありません。

そこで、本号から「アメリカの有権者教育」について五回に分けて連載することになりました。

★投票の罠に陥るな

小学校の授業では、低学年から内容を知らないで投票することの怖さを学ばせています。

「以下の三つの問いに賛成か反対かで答えてください。」

- ① アイススクリーム
- ② 宿題
- ③ 休み時間

小学校の教室でこの問いを聞けば、子どもたちはそれぞれ「賛成」「反対」に手を上げる。ここで、先生は、以下のような紙を配る。

「①にんにく味のアイススクリームを学校給食で提供する。」

②週末の宿題をなくす。

③休み時間は、腹筋訓練の時間にする。」

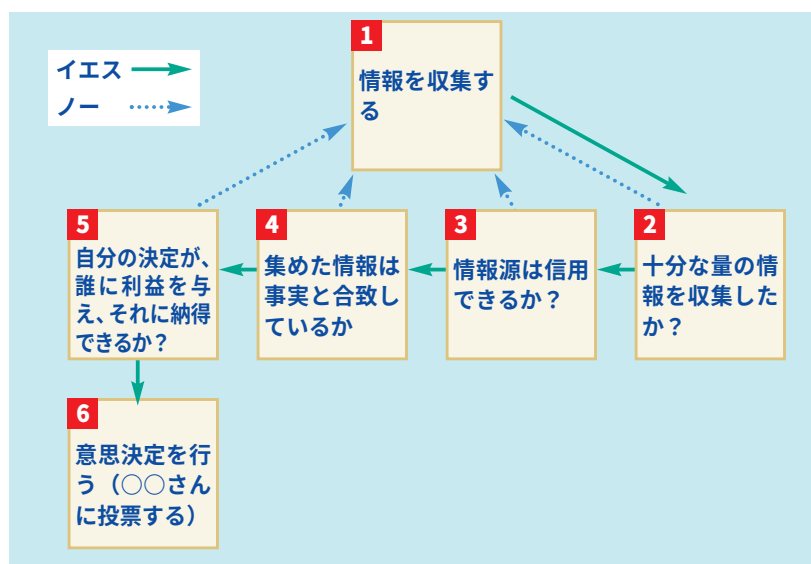
教室にはブーイングが起きることになる。

アイススクリームは食べたいが、にんにく味はご免こうむりたい。特に週末の宿題はない方

横江 公美 (よこえ・くみ)

●Profile

1965年、名古屋市生まれ。明治大学経営学部卒。94年に松下政経塾に入塾(15期生)。その間、プリンストン大学客員研究員、ジョージ・ワシントン大学客員研究員として、アメリカ大統領選を中心に世界の選挙の実地研究を行う。VOTEジャパン株式会社社長を経て、現在「PACIFIC21」代表。政策、世論調査、広報戦略に関するコンサルティングを行っている。明治大学非常勤講師。著書に「Eポリティックス」「第五の権力 アメリカのシンクタンク」(以上文春文庫)、「判断力はどうすれば身につくのかーアメリカの有権者教育レポート」(PHP新書)



がいい。ちょっと太目の子どもにとっては腹筋は辛い。甘い一言を聞いて、確認することなく、意思決定を行うと、とんでもない結末が待っている。

このようにしてアメリカでは小学生が、情報を確認することなく投票してしまうと「投票の罠」に陥る可能性があることを学んでいる。そして、前頁下図のような投票を決定するまでの投票チャートを学ぶ。

投票までの過程を見ると、「情報収集」が鍵になっている。投票行動を決定する場合、まずは、手当たり次第に関係する情報を収集する。ある程度、集めたところで、必要な分野の情報が集まっているかを確認する。足りないと思えば、もう一度、情報収集を行う。必要な情報をすべて集めたと思えば、次は、それぞれの情報の質を確認する。まずは、情報源は信用できるかどうか、である。特に最近では、誰でも簡単にインターネットを使って情報を発信できるようになっているので、情報源の信頼性を確認することは重要になっている。マス・メディアや専門家が発信したニュースでなくても、情報源の明示があり、確認できれば、信用できる情報としてもよいだろう。

次に、情報の確認である。信用できると思われるマスメディアのニュースでも時には、間違いがある。「四・五」が反対に「五・四」になっていることもある。また、

伝えたいことがあるために、事実には間違いがないが、事実をはしょったりすることもあ。特に、政治家のパンフレットは、メッセージ性が強いだけに、自分のメッセージと異なる結果を生む事実は掲載しない。メッセージに近い事実だけをうまく掲載する。そこで、将来に関する数字などについては、誰が算出した数字なのか、その数字が算出される前提条件は何であるのか、を確認することも必要になる。

さて、充分な情報だ、ということになると、そろそろ、意思決定を行う。ここで、自分が出そうとしている意思決定の影響を考える必要がある。自分の意思決定はどんな人に利益を与え、どんな人に不利益を与えるのか、冷静に考える。意思決定の影響に納得できれば、意思決定を行うことになる。

アメリカでは、小学校の時から、意思決定の方法を教えている。意思決定は、感情だけで決めるものではなく、徹底した情報収集に基づいて行われるものである、という認識がある。

★選挙は最高のワークショップ.. ブッシュ大統領の学校訪問

チャートを暗記させても意味がない、という考えのもと、意思決定を行う訓練が、小学校、中学校、高校のあらゆる場面で行われて

いる。

例えば、大統領選挙は、有権者教育の最大のイベントである。選挙は有権者だけではなく、有権者予備軍にとっても最高の教材になっている。「キッズ投票 Kids Voting」と呼ばれる非営利団体は、子どもたちによる模擬大統領選挙のプログラムを用意しており、〇四年一月の大統領選挙では一五〇万人の子どもたちが、一万余カ所の模擬投票所で投票した。

このため大統領選挙の候補者は、有権者予備軍、つまり子どもたちへの選挙運動も繰り広げる。選挙で候補者が政策を広めることを英語では「Educate」という。選挙は、政党や候補者にとっては、今の社会の問題を洗い出し、それを提示する場である。つまり、忙しくてあらゆる分野に横たわる社会問題を考える時間がないほとんどの人々のために、



国連をもじって国の名前がクラスにつくチャーター・スクールの授業風景

政治の専門職についている候補者は、問題点と解決案を提示する（教える）のである。選挙の役割は、代表者を決めるこ

とに加えて、有権者への政治の「教育」の場なのである。さらに、有権者予備軍への教育の場でもある。

そこで、候補者は率先して有権者予備軍の教育に貢献する。大統領候補は子どもを巻き込んで選挙運動を行い、判断に必要な情報を候補者の立場で提供している。

二〇〇四年九月一〇日ブッシュ大統領は、接戦が予想されたオハイオ州に選挙運動に訪れた。その時、高校一年生のディロン・マクドナルド君はブッシュ大統領に質問をぶつけた。「僕はクラス委員に立候補しています。ブッシュ大統領が僕への支持を約束してくれたら、嬉しいですよ。」会場は笑いで包まれた。「君は正しい選挙運動をしているよ。私が一四歳の時には、こんなにたくさんのか메라の前で話すなんて絶対できなかったよ。君への支持を約束するよ。」

そして、最後に、「君の選挙結果を必ず見るよ。」と付け加えた。

学校の先生は、共和党員、民主党員に関係なく、「大統領が学校を訪問することは、子どもたちにとっては、最高の教材です。」と口を揃える。日本で政治家が学校を訪問するというと、全校集会で挨拶を行うだけ、というイメージだがアメリカの事情はかなり異なっている。小学校でも、候補者が学校を訪れる時、転校生のように紹介され、先生の横の椅子に座って一緒に授業に参加する。高校の

場合はディベートの授業に参加したり、小学校では「誰を尊敬していますか」といったおませで可愛い質問に応じたりと、子どもの視線で参加する。

大統領候補者の選挙事務所には、小学校や中学校のクラスから届く色とりどりのカードや手紙があちこちに貼ってある。そのほとんどはクラスの紹介と候補者の学校訪問の要請である。クラス写真が貼ってあったり、候補者の似顔絵が書いてあったり、選挙事務所で戦闘状態で働く人々は、それらの手紙の横を通るたびに微笑んでいる。

★選挙事務所も有権者予備軍対応あり

選挙事務所では、子ども用の争点説明シートも作成している。大統領選挙期間中、一日八〇〇通ほどの手紙が事務所に届く。そして、なんと、そのうちの三分の一、二五〇通以上が選挙権のない有権者予備軍からの手紙なのである。

前記のような可愛い学校訪問の招待状に加えて、政策に関する質問や、提案が子どもたちから届いている。私が一九九六年にインタビューをした共和党の大統領候補者ボブ・ドール選挙事務所へ届いた手紙は以下のようなものだった。

テレビ討論会の直後には「自信がないように見えました。あまり下を向かないことと、

まばたきをたくさんしています。弱々しく見えますので、気をつけてください。」

「タバコの増税に反対ですね。しかし、私の父はいつも禁煙するといいますが、できません。タバコ政策について再考してください。」

「学校の授業で、大統領候補者の争点比較を行います。僕の担当は福祉です。福祉政策について教えてください。」

「私は海が好きです。海に行くたびに海が汚くなっている気がします。海を綺麗にしてください。」

子どもたちの手紙に対して、選挙事務所は子ども用返信セットを用意する。子ども用と言っても大人顔負けの量と質になっている。内容は、大人の要約版であるが、子どもだまではない。忙しい大人にとっては、子ども用シートを読めば十分といってもいい。

選挙事務所の手紙チームは、手紙の内容を読んで、関連項目のシートを入れて、返信する。例えば、海の汚染について手紙を書いた子どもには、ボブ・ドールと副大統領候補のジャック・ケンプの写真、そして、三種類の教育に関する争点シートという基本返信セットに加えて、子どもが興味をもっている「環境」に関連する争点シートを加えて郵送する。

誰でも理解できるように子ども用の争点集をつくることは、かなりの時間と能力を要するが、それでも選挙事務所は子どもへの教育の役割を認識し、時間と人を割り当てている。

争点を学ぶ環境

前号(二八三号)では、意思決定をする手順について述べた。本号では、**個人の意思決定を助ける争点に関する情報環境について紹介したい。**

選挙で誰を投票するのか、という意思決定を行うときの基本は情報収集である。今回の選挙の争点は何か。話題になっている争点について、政党はどのような政策を提案しているのか。各候補者は自分の言葉では、どのように提案しているのか。マスメディアが取り上げる争点ではないが、自分にとって重要な争点について、政党や候補者はどのような政策を提示しているのか。有権者はこのような争点に関する情報収集を行い、争点に関する考えを決め、そして誰に投票するかを決定することになる。

アメリカでは大統領選挙は二年近く、中間選挙でも一年近くが選挙態勢になる。政党と候補者は選挙キャンペーンを繰り広げ、そしてマスメディアも、選挙特集を組む。日本に比べると、これだけでも、選挙に関しての情報が多いが、「これでも足りない」、とアメリカでは思われているようだ。

実際、政党や候補者の演説や配布物は、読み物としては面白いものではない。選挙に関する情報収集は投票という権利を行使するた

めの義務だとしても、ある程度成熟した民主国家では、「政治は関係ない」といつてしまえる余裕ができていく。

安定した社会において、面白くないことはしたくない、と感じることや、それほど大きな変化があるとは思わないことに時間を費やしたくない、と思うことは、皮肉な言い方だが本能にそっている。

そこで、「投票のための勉強をしない人が悪い」と目くじらを立てて個人の責任にしない取り組みがアメリカでは起きている。

つまり、楽しく、何気なく、選挙に関する情報が社会に回る環境を構築している。本能に沿った環境つくり、大きく貢献するのは、MTVやコメディ・チャンネルなどのテレビ番組である。

★若者に争点教育をするMTV

日本だけに限らずアメリカでも投票に行かない層の代表は、若者である。最近では、若者の二五%しか投票していない、といわれて

横江 公美(よこえ・くみ)

●Profile

1965年、名古屋市生まれ。明治大学経営学部卒。94年に松下政経塾に入塾(15期生)。その間、プリンストン大学客員研究員、ジョージ・ワシントン大学客員研究員として、アメリカ大統領選を中心に世界の選挙の実地研究を行う。VOTEジャパン株式会社社長を経て、現在「PACIFIC21」代表。政策、世論調査、広報戦略に関するコンサルティングを行っている。明治大学非常勤講師。著書に「Eポリティックス」「第五の権力 アメリカのシンクタンク」(以上文春文庫)、「判断力はどうすれば身につくのかーアメリカの有権者教育レポート」(PHP新書)

いるほどだ。大統領から地方政府の政治家まで政治家の演説には「若者の未来のために」というフレーズをよく耳にする。大枠では、若者の視点も入っているわけだが、頻繁に議論される争点は、若者の関心事ではない。次世代を考えて社会保障を語れば、給付金の減少という考えに落ち着くが、この視点では、高齢者の投票は期待できなくなる。高齢者の投票率が高い、という現実の前では、どうしても、高齢者にとって耳触りの良い公約が飛び交うことになる。そして、若者は居場所がないと聞き直り、さらに、政治から置いてきぼりをくらう、という悪循環が存在している。ここに役割を見出したのが、MTVである。MTVの二〇〇四年の大統領選挙における取り組みを紹介しよう。

二〇〇四年三月、各政党が候補者を選出する予備選挙が終焉し、共和党も民主党も候補者を決定し、選挙が本格化する時、MTVはワシントン・ポストなど大手新聞に全面を使った広告を掲載した。「投票するか、敗者になるか。2004」MTVはこれか

ら投票日まで、若者向けの選挙に関する報道番組を放映すると宣伝した。この番組は名前のとおり「選挙に行こう」がメッセージになっている。

番組は「もし、あなたが投票しないことを選択したなら、他の誰かがあなたの代わりに選択する権利を得るでしょう。」という言葉から始まり、若者にとっての争点は三つのEつまり、経済 (Economy)、教育 (Education)、環境 (Environment) である、と流れる。MTVは、この三つのEを若者を対象に行った独自アンケートから導き出している。

第一回の番組では、今年、初めて有権者になる若者が、次々に登場し、どの候補者を支持しているのか、なぜ支持しているのかを、自分の言葉でスピーチした。登場する若者はリサーチが必要だし、見ている若者は、等身大の刺激を受けることになる。

MTVでは、大統領選挙に関連するニュース・プログラムも放映した。予備選挙の天王山といわれるニューハンプシャー州の予備選挙、党の候補者がだいたい判明する三月のスーパー火曜日、各党が公式に候補者を指名する全国党大会、候補者によるテレビ討論会、そして投票速報を放映した。もちろん、MTVはロックのテンポでチャンネルをかえる若者が飽きないように、工夫を凝らした。共和党と民主党の全国党大会に赴き、政治セレブリティを取材したのは、人気ラップ歌手のP・ディディだった。大粒のダイヤのピアスに独特のラッパ・ファッションで党大会に参入し、突撃インタビューを繰り広げた。民

主党の党大会では、ヒラリー・クリントン上院議員が突然、マイクを向けられたが、ここやかに対応していた。

MTVは、セクシーな映像のプロモーション・ビデオやお騒がせのスターたちが登場する、若者に絶大な人気を誇る音楽チャンネルである。日本の若者もビルやコーラ片手にポテト・チップスやピザをつまみながら、MTVを楽しんでいる。全世界の若者に支持されているが、行儀が良い番組とはいえない。アメリカのネットワークのテレビ番組は驚くほど品行方正である。日本では当然のようにテレビの映画放映で流れるきわどいシーンはことごとくカットされている。そのため、特別なR番組（成人用チャンネル）と契約していない普通のケーブルテレビの番組では、MTVに流れる映像はもっとも過激なのである。



MTVのホームページ
<http://www.mtv.com/chooseorlose>

ソファーに寝転がってブリトニー・スピアーズの最新ビデオを見ていたと思ったら、「選挙に行こう」のメッセージが流れ、さらに大統領選挙に関するニュースも流れる。MTVは、自然に見てしまう「選挙教育」を目指している。

MTVが選挙に影響を与えたと思われる例もある。一九九二年の大統領選挙では、ジョージ・ブッシュ（父）が再選すると思われていたが、ビル・クリントンに負けてしまった。この選挙では、勝敗の要因はさまざまであるが、クリントンはMTVを活用し、ブッシュはMTVを無視した。MTVは大統領候補者を招待し、若者が質問する、という番組を企画した。「マリファナを口にしたことがあるが、吸ったことはない」という迷言をクリントンから引き出した番組である。ここでクリントンはサクソフォン演奏もお披露目した。しかし、ブッシュは、MTVからの出演依頼を「ロック狂いの少女が見る番組」として出演を拒否した。

一九九二年の選挙が教訓になったようで、今やどの大統領候補者もMTVを大事に扱うようになった。MTVによると、二〇〇四年の大統領選挙では二一〇〇万人の一八歳から三〇歳までの若者が投票し、目標は二〇〇〇万人であったので、大成功を収めた。MTVの選挙報道は、若者の争点教育において、候補者からも今や無視できない存在になっている。

★毎日のニュースはユーモアが一杯

二〇〇四年の大統領選挙では、コメディ・チャンネルも大きな役割を果たした。無理せず政治を学ぶ環境を提供することに力を入れ、個人も無理をしないアメリカでは、深夜のコメディ・ショーが日々のニュースをユーモア一杯に提供している。

平日の午後一時三〇分に始まるレイト・ショーやトゥナイト・ショーは、毎日のニュースがユーモア一杯に番組に入っている。そして土曜日午後一時三〇分に始まるサタデー・ナイト・ライブでは、毎日の事件や一週間の事件をパロディにして放映する。過剰演出もあるが、だいたい、何が起きているかは知ることができる。コメディでニュースを知るといえるのは一つのアメリカの文化ともいえるのかも知れない。

二〇〇四年の大統領選挙では、圧倒的に支持を得たコメディ・ニュースが誕生した。コメディ・セントラル（チャンネル）で午後一時から始まるザ・デイリー・ショーだ。これは、毎日のニュースや話題の人物をユーモアとパロディで紹介する。司会のジョン・スチュワートは、笑いと政治のセンスをもち、さらに、政治家とのネットワークも構築する。

パロディ・ニュースは笑いの中に、往々にして真実を伝える。スチュワートは愛情一杯の皮肉ある質問をニュースの人物に浴びせかける。そして、嫌味のない笑いで包む。ザ・デイリー・ショーは、大学生の必見番組であった。「今の大学生のほとんどは、ニュースをコメ

ディ・チャンネルのザ・デイリー・ショーから得ています」インタビューをした政治学部の教授は口を揃えた。

この人気に乗じて、スチュワートは有権者教育の教科書「We The People」のパロディ版ともいえる「デモクラシーの有権者ガイド」ジョン・スチュワートのザ・デイリー・ショー版「The Daily Show with Jon Stewart Presents America (The Book: A Citizens Guide to Democracy Inaction (Hardcover)」を選挙の一ヶ月前に発売した。

当時、大学のキャンパスを歩くと、持ち運ぶには重いこの本を抱えて歩く大学生を頻繁に目にした。この本はアメリカのデモクラシーを皮肉一杯に紹介するが、基本知識のぶれはない。資金やロビー活動、選挙運動については意地悪な見方をすればいくらでもできる。皮肉一杯に面白く説明しているので、楽しくアメリカの政治システムを学ぶことができる一冊である。発売から一年近かった二



「バック・トゥ・スクール」特集の書棚

〇〇五年の夏にも、この本は本屋に並んでいた。九月からの新学期にむけてこの本屋さんでも、「新学期開始…バック・トゥ

ー・スクール」特集の棚を設置する。その棚に並んでいた。

★楽しく争点を学ぶ環境

本号で紹介した、争点を楽しく何気なく学ぶ環境づくり、つまり「本能型争点教育」には、違和感を覚える人も多いだろう。しかし、「政治は背筋を伸ばして勉強するもの」、と決めた時代ではないのではないだろうか。国が安定し民主主義もある程度、成熟してくると、投票率は落ちてくる。

投票率の数値だけの議論だけではなく、さらに、人々の勉強不足をなじるのではなく、等身大の争点に関する情報を提供する環境づくりが必要ではないだろうか。政治について、何気なく、さらには、楽しく学べる環境づくりは、これからの日本には必要なエッセンスになる。

MTVやコメディ・セントラルの試みを、「衆愚政治への危険を孕む」と一蹴することは簡単だ。しかし、実際、MTVの選挙関連のニュースを見れば、三つが争点になる理由や、それらに関する各候補者の考えもわかる。選挙で何が起きているかもわかる。ザ・デイリー・ショーでは笑いながら、ストレートのニュースだけではなく、ニュースの裏も見ることがある。

日本にも、ザ・デイリー・ショーやレイト・ショーのような、楽しく学べるニュース・トーク・ショーができることを期待してしまう、この頃である。

有権者予備軍への争点教育

時事問題について自分なりの意見がありますか。時事問題を追うだけでも骨が折れるのに、その意見まで決めるとなると、大人でも骨が折れる。今回は争点に関してどのように意見を決めるのか、という子ども向け訓練を紹介します。

★豚の臓器を人間に移植することに賛成？反対？そしてなぜ？

カリフォルニアのシリコンバレーには、テック・ミュージアムがある。そのゲノムコーナーには連邦議会の壇上が復元されている。

入場券を買った時にもらったバーコードを、連邦議員の壇上の横に設置された機械にさらす。すると、目の前のコンピューターに「豚の臓器を人間に移植することを認めるか」と質問が登場する。イエスを選ぶと、なぜ、認めるかの理由が四つ登場し、その中で自分の意見にもっとも近いものを選択する。すると、その意見にあわせた連邦議員の演説の原稿が登場する。話す速度で流れるので、子どもたちは連邦議員になった気持ちでその壇上で演説する。終わると、壇上からおり、隣りに設置された機械にバーコードをかざすと、目の前のコンピューターの画面に、先ほど自

分が壇上で演説した画像が登場する。つまり、にわか議員ごっこを楽しむことができるコーナーになっている。

ここで驚いたのは、こういうコーナーが存在するというだけでなく、小学生一、二年生の子どもに対しても臓器移植の考えを当然のように要求し、子どもも選んでいる、ということだった。

アメリカでは、子どもが自分の考えを決めるための学校教育とそれを可能にする環境はどうなっているのだろうか。

★争点教育の三つの原則

現在、学校で基本として教えられている争点に関する有権者教育は、それぞれの学校の教育方針や、公立か私立か、さらに、地域によっても異なるが、三つの共通原則をもつ。

① 具体的な争点について議論する時、賛成と反対と立場を明確にする。

横江 公美 (よこえ・くみ)

●Profile

1965年、名古屋市生まれ。明治大学経営学部卒。94年に松下政経塾に入塾(15期生)。その間、プリンストン大学客員研究員、ジョージ・ワシントン大学客員研究員として、アメリカ大統領選を中心に世界の選挙の実地研究を行う。VOTEジャパン株式会社社長を経て、現在「PACIFIC21」代表。政策、世論調査、広報戦略に関するコンサルティングを行っている。明治大学非常勤講師。著書に「Eポリティックス」「第五の権力 アメリカのシンクタンク」(以上文春文庫)、「判断力はどうすれば身につくのか—アメリカの有権者教育レポート」(PHP新書)

賛成、反対の立場で論理的に構成し、判断する能力を養うためである。教師は、争点学習が円滑に進むように、賛成、反対のアウトラインを提供する。

② 時事的なテーマを取り上げる。

時事的なテーマを取り上げると、子どもたちの学習意欲が上がる。自分の判断をもちたいというモチベーションは否が応でも高くなる。また、選挙での投票は、時事の争点に中心だ。有権者教育では時事問題に関する争点学習は、基本中の基本である。イラク戦争勃発後、小学生の算数の授業までが、生徒によって話題がイラク戦争に移る、といわれている。現在、起きている事件に関する興味は大きい。

③ 時事問題の争点学習は、マス・メディアの協力が必須である。

時事問題を取り上げ、議論する場合、マス・メディアが提供する子供用ニュースやデーターベースが必須アイテムになっている。時事テーマは「今」のことなので、教科書が存在しない。教師だけにその準備を任せること

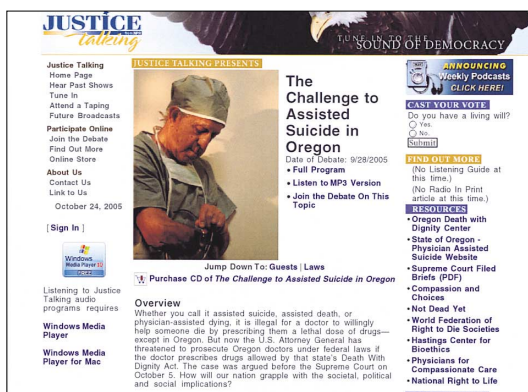
は荷が重過ぎるからだ。

争点教育は、子どもにとって受身の教育ではない。自らが、マス・メディアや大人たちから情報を集め、考え、そして論理を組み立てて判断しなければならぬ。そこで、アメリカの各マス・メディアはそれぞれのスタイルで争点学習に貢献する。

★賛成・反対の討論ラジオ番組 —ジャスティス・トーキング—

全米公共ラジオ（NPR）は、毎週、一つの争点を取り上げ、その争点について賛成する専門家と反対する専門家が議論を行うラジオ番組を放送する。

二〇〇三年一二月、高校生の争点に学校での性教育のあり方が浮上した。議会が「節制教育」に一億ドル（二一〇億円）を支出することに決めたからだ。ジャスティス・トーキ



2005年10月12日 ジャスティス・トーキングのサイト
今週のテーマは、安楽死について。

ングも早速、「節制教育」を取り上げた。

ラジオ番組の最初は、新しい法律、そして今までの法律、そして現状についてのレポートが行われ、次に、賛成意見の専門家と反対意見の専門家が登場して議論するのが、一般的なジャスティス・トーキング・ラジオ・プログラムのスタイルだ。この日も、一億ドルが通過した背景や学校での性教育の変化についてのレポートを行い、賛成者の代表として健康福祉省のウェイド・ホーン次官補が登場し、反対者の代表としては若者の権利を代弁する非営利団体「若者の主張（Advocate for Youth）」のジェームズ・ウェゴナー所長が登場し、議論を繰り広げた。

節制教育は、ブッシュ大統領夫妻が就任当時から強烈に掲げてきた政策だっただけに、ホーンは、コンドームなどに関する教育を行うことは、初体験を早めることになる、と懸念し、節制教育のみが妊娠や性感染症を予防することができるとの議論を展開した。「若者の主張」のウェゴナーは、初体験を節制教育で遅らせることはナンセンスであり、現実的な教育を行うことが重要だと反論した。

この番組は、中学生や高校生に、将来誰に投票するのか、どの政党に所属するのか、といったことを決定する規準となることや、争点に関する考え方の形成を補助することを目的とする。この番組は、中学生や高校生が、自分の争点整理のために個人的に聞くこともあるし、教師が中学校や高校の時事問題を扱う授業で利用することもある。

ジャスティス・トーキングは、ディベート

の模範例を示すことを目的とし、最初の五分間は、ヒューマンストーリーも入ったレポートを放送し、その後、ゲストの二人が議論する。そして、観客や司会者からの質疑応答を行うというスタイルで行われる。

議題は、高校生に関係があるか、興味をもちそうな学校選択制や憲法、性教育、犯罪についてだ。リスナーの中心は高校生であるため、常に、誰もが興味をもつ一面のニュースを議題に設定するわけにもいかない。例えば、一九九九年は、クリントン大統領のセックス・スキャンダルが毎日一面を飾ったが、これを高校生相手に議論することはできない。

ジャスティス・トーキングは性に関する議題は扱わないことにしていたが、ポルノを扱う検閲制度や、前述の学校での性教育に関するテーマは思い切って扱ったという。これらは学生たちに直接関係あるだけに、大いに盛り上がり上がっただけでなく、誰からも文句はこなかった、という。

ジャスティス・トーキングの運営では、議題選びがもつとも難しい。あまりに教育的要素が強いと、十代は敏感に感じ取り、そっぽを向いてしまうからだ。

「楽しく争点整理」がジャスティス・トーキングの最大のテーマである。

二〇〇〇年には、インターネットの利用者拡大の影響で、いつでも争点に関してリサーチができるように二つのウェブサイトを立ち上げた。

一つは、ジャスティス・トーキング Justice Talking (<http://www.justicetalking.org/>) で

ある。過去のラジオ番組の内容や関係資料がデータベース化され、興味にあわせて閲覧できるようなっている。また、ここでは、取り上げた争点に関連する法律も紹介する。学校の教科書には時事問題は取り上げられていないし、新聞の報道では関連法律まで全文、掲載しないからだ。

もう一つは、二〇〇二年八月に完成したジャスティス・ラーニングJustice Learning (<http://www.justicelearning.org/>) である。

これはニューヨーク・タイムズとの協力で、議論に関係する新聞記事を掲載する。デイベートなどさらなるリサーチが必要な時、つまり、ジャスティス・トーキングよりもさらに議論を掘り下げたい時の情報収集に利用できるようなっている。

両方とも、教師向けの指導計画も記載されており、学校を巻き込んだ争点整理ができる環境を目指している。

★イエス・ノーの組み立てを補助する雑誌

ニューヨーク・タイムズ・アップフロントは、ニューヨーク・タイムズ紙が発刊する、アメリカの歴史上、初めて十代を読者とした争点を提供する雑誌である。主なターゲットは高校生として構成されている。アップフロントは楽しく学べる子ども用のメディアとして有名なスコラステック出版社の協力を得て、一年に一四回発刊している。

敏感なニュースや争点、そして、十代向け

の世論調査を実施し、雑誌とサイトで全米に争点教育のもととなる情報を提供する。

アップフロントのサイトでは、争点が提供され、デイベート形式で賛否を問う投票が行われる。大統領選挙は争点が注目を集めるので、他のマスコミと同じように、特に取り上げる。二〇〇四年大統領選挙の期間は、選挙で話題になっている争点やニュースを常に報道している。最低投票年齢を一八歳から一六歳に引き下げる、という争点を自ら提示しキャンペーンも行っている。

アップフロントの執筆陣は、ニューヨーク・タイムズ紙の記者と教師である。アップフロントの内容を見てみよう。二〇〇三年二月八日付けの場合、米軍の捕虜になったイラクのサダム・フセインに関する特集記事がトップで、民主党のジョン・ケリー選挙事務所とのボランティアへのインタビューが続く。そして、現代文明の機器を使わない厳格な規律をもつ、キリスト教の一宗派であるアーミッシュ家庭の子どもがコンピューターを使う権利、アジア特有の男子優遇思考のため極端に少ない少女の比率に関する記事が掲載された。

国内問題から国際問題まで幅広く取り上げ、そして、マイノリティー問題にも野心的に触れている。サイトでは、過去の記事もデータベース化されており、興味をもてば、いつでも検索可能になっている。

また、グリーンヘブン・プレスは、一つの争点に関して、賛成の視点と反対の視点を提供するシリーズを出版する。通常、一冊の本

は筆者が争点に関して自分の立場を紹介するために書かれているため、その本から反対の意見を論理的に知ることはできない。争点シリーズは、社会、政治、経済の分野で経常的に議論されているテーマ、性感染症、臓器移植、イラク戦争、石油の海外依存度など、現代社会の病巣を取り上げている。

こういったイエスとノーの意見が一目瞭然になっている教科書ガイド的なサイトや本の存在は、何かと忙しい子どもと教師の助けになっている。自分の立場を曖昧にしないためには、きちんとした意思決定の手順を踏むことが必要だ。

こういうものの存在から、有権者予備軍たちは、自分にとって気になる争点を発掘していくことになる。



選挙が近くなると、本屋の装いも右と左に分かれる。

アメリカの 有権者教育 レポート〈第4回〉

映画で政治を動かす方法 を学ぶ

今まで、三回、有権者としての最大の権利である「投票」に関する教育について紹介した。今回は、立法、行政に携わる人を育てるアメリカの環境について紹介しよう。

政治家になるための教育・訓練は、選挙で戦うことだけではない。考えてみれば、選挙運動の能力と立法・外交に関連する仕事は、別である。「政治家」という職業につくためには、それなりの教育が用意されている必要がある。また、大掛かりな選挙を法に触れずに有効に行うためにも、教育は必要である。

今回は、映画を見ながら楽しく、政治の動かし方を学んでしまう映画を紹介しよう。

★立法過程を教える映画

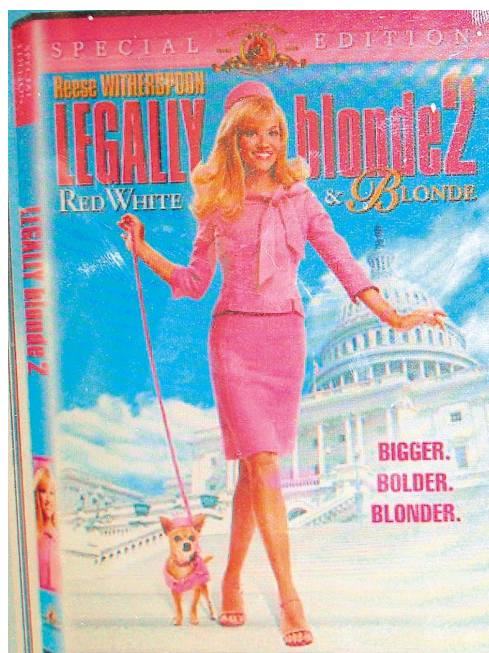
二〇〇三年に公開された、「キューティ・ブロンド2」は、コメディ映画だが、有権者教育が全編を通して散らばっている。

リース・ウィザースプーンが演じる主役のエルは、ハーバード大卒のエリート弁護士。ひよんなことから政策を変える必要を感じ、単身、首都ワシントンに乗り込んでいく。ブロンドのキューティな美人が、あの手この手を駆使して結局、法律を作ってしまう、という内容だ。アメリカでも、ブロンドに青い目の

女性は男性から人気がある。「彼女は豪華だ」という女性への最大の賛辞を送る。

しかし、同様に、「頭が悪い」というステレオタイプの嫉妬を交えた意地悪な見方もある。

この映画は金髪娘のステレオタイプをも、パロディにする。主役のエルは、バード人形かジャクリン・ケネディ夫人をイメージさせるピンクのスーツで身を包む。黒か紺のシックなスーツが当たり前の国会では、一人だけ浮きまくる。しかし、犬好きの議員や、ピンク大好き



が集まる女性社交クラブを駆使し、一〇〇万人の動員も成功させる。そして、ついに「化粧品の開発のための動物実験を禁止する」という法案を見事、可決させる。

日本人の私は、アメリカでは、国会議員でもない一人の女性が、議会で答弁できるんだ、と驚いたり、動員の方法を学んだり、映画の出来ではなく、アメリカの仕組みに感動してしまった。

エルが推す法案の動機も笑ってしまう。結

横江 公美 (よこえ・くみ)

●Profile

1965年、名古屋市生まれ。明治大学経営学部卒。94年に松下政経塾に入塾(15期生)。その間、プリンストン大学客員研究員、ジョージ・ワシントン大学客員研究員として、アメリカ大統領選を中心に世界の選挙の実地研究を行う。VOTEジャパン株式会社社長を経て、現在「PACIFIC21」代表。政策、世論調査、広報戦略に関するコンサルティングを行っている。明治大学非常勤講師。著書に「Eポリティックス」「第五の権力 アメリカのシンクタンク」(以上文春文庫)、「判断力はどうすれば身につくのか—アメリカの有権者教育レポート」(PHP新書)

婚式に飼い犬の親を招待するために探したら、化粧品用の動物実験に使われる順番を待つ身であった。そこで「化粧品の開発のための動物実験を禁止する」という法律を作ろう、というのだ。

政治家ではない普通の人が、簡単に、立法に影響を与える手順を紹介しよう。

法案に賛成してくれる国会議員を探し、その事務所のスタッフになる。国会議員の名前で法案を提出する。そして、委員会や公聴会が開かれるように、議会内を調整する。賛同する議員を探す。その法案に賛成する議員が多くなるように、ワシントンでデモイベントを企画する。自らが、議会で法案の重要性についての最後のスピーチを行う。

極上な映画ではない。しかし、大笑いしながら、アメリカの政治ってこんなに風通しいんだ、私にも政治が変えられそう、と思わせる、飛び切りの有権者教育の映画だ。

★「エレクション」

次に選挙運動の初歩を教える映画を紹介しよう。

一九九九年、「エレクション」という映画が公開された。アカデミー賞にノミネートされたほどの出来栄で、大笑いのコメディである。加えて、アメリカ人の政治に関する人生観もよくわかる映画である。

「高校の生徒会長選挙を取り上げているが、簡単にアメリカの選挙運動のしくみを知るのは、最高の映画ですよ。」と政治学者に薦められたほどの映画なのだ。

映画の内容は、将来を見越して政治的野心が一杯の優等生の女子高校生が、生徒会長に立候補する話である。内容を紹介しよう。

リース・ウィザースプーンが演じる主役のトレイシーは、高校の生徒会長に立候補した。あまりの野心の強さのため、心の友はいない。そのため、相談に乗ってくれていた教師のディブと不倫に陥る。ディブは不倫がばれて失職し妻も失う。不倫事件は公になることはなくディブが責任をとって幕を閉じる。

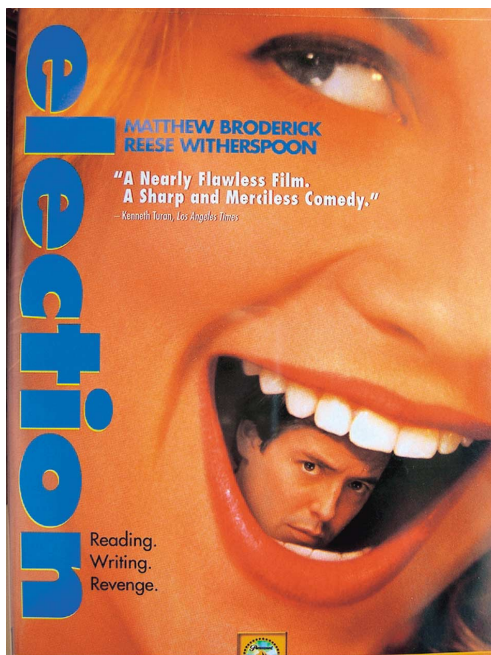
さて、生徒会の顧問である、マシュー・ブロディリック演じるジムは、ディブとは同僚だけではなく友達でもあった。当然、ジムは不倫の事実を知っている。無垢な顔して野心街道を突っ走るトレイシーに腹を立てている。そこで、彼女以外には誰も立候補せずに、彼女の信任投

票になるはずだった選挙に、おつむが弱いが学校一の人気を誇る花形アメフト選手の男子生徒のポールを説得し、会長に立候補させる。それから、校内選挙運動は活発化することになる。サポーターを募り、ポスターを貼る。選挙資金の上限も決まっている。討論会を行う。高校の生徒会長選挙は、本物の選挙さながらに行われる。

どうしても、当選したいトレイシーは、ポールのポスターを剥がしにかかるが、幸い、誰にも見つかることはなかった。どうしてもトレイシーを当選させたくないジム先生は、なんと、開票で不正を働いてしまう。一票差で、男子生徒ポールが当選するが、ジム先生の不正が見つかり、トレイシーが見事当選する。ジムは、職を失い、ニューヨークへ出発する。トレイシーは、「生徒会長」という経験も手伝って、首都ワシントンDCの名門校ジョージタウン大学に入学。その後、大物連邦議員のスタッフになって精力的に働くところで映画は終わる。

政治に関わる人とはこんなものさ、というブラック・ユーモアともいえる終わり方の、一見、政治を批判するかのような映画である。しかし、高校での選挙がどのように行われているかを知るには最高の映画である。つまり、高校の生徒会長選挙は本物の選挙のミニチュア版であるため、何気なく見ているだけで、本当の選挙の方法を大枠でつかめるのである。

パロディ的要素も強いし誇大に描かれているのは確かだが、生徒会長選挙のやり方が細



返るほどだ。

★大統領選挙と映画

かく描かれている。校内で政策討論会が行われ、基準の金額まで資金を集めて、ポスターやチラシなどの選挙運動グッズを用意する。学校によっては、生徒会の選挙資金のために額の制限を決めて資金集めを認めるところもある。例えば、一人一ドルで合計二五ドルまで集めても良い、というレベルである。この費用はポスターやチラシの作成などに使われることになる。

この映画をみると、実際に高校の生徒会長選挙に関係した生徒たちは、選挙運動の方法を身を持って学べるんだろうな、と思ってしまふ。

高校では、本物の選挙運動さながらに行われる生徒会長選挙に加えて、ミス高校などの選挙も行われている。立候補者やそのスタッフになった生徒は、選挙運動の方法を詳細に学ぶことになる。

一九九六年のクリントン大統領の再選への道筋をつけたといわれる世界でもっとも有名な選挙コンサルタントのディック・モリス氏も、高校の生徒会長選挙に携わった経験から、選挙コンサルタントの道を歩み始めた。彼は高校の生徒会長選挙で候補者の参謀を務めた。構内の政策を作り、ポスターやチラシの内容を考え、その配布や資金集めの戦略を立てた。ちなみに、彼が応援した候補者は見事、当選した。かつ、その時のライバル候補の参謀も、また、選挙コンサルタントになっている。

「この経験がなければ、コンサルタントになつていないかもしれない」と、モリスは振り

アメリカでは、選挙に関する映画がたくさんある。大統領選挙の裏側をも伝えた一九七二年の「候補者ビル・マッケイ」は、今や古典になっている。今でも頻繁にテレビで放映されている。

「候補者ビル・マッケイ」は、ロバート・レッドフォード演じる若手弁護士が上院議員に立候補し当選するまでを描いており、大統領の選挙運動の裏側を詳細に描いている。ビルは最初は大志に燃えてやる気満々であったが、次から次に登場するスキャンダルや問題で、心と頭が空っぽになっていく。そして、ついには、選挙コンサルタントの操り人形になってしまう。見事に当選を果たすが、最後のシーンがなんとも悲しい。勝利演説を待ち望む大衆の前に登場する瞬間、選挙コンサルタントを振り返る。そして一言。「今から、俺は何をすればいいんだ」。

一九七二年当時、すでに、大統領選挙では選挙コンサルタントという職業が存在し、大掛かりに選挙が行われていた。選挙運動の運営までも知ることができる映画である。

最近では、ジョン・トラボルタが主演を演じ、女性スキャンダルの中で大統領選挙を戦う「パーフェクト・カップル」(原題「プライマリー・カラーズ」)や、ダスティン・ホフマンが主演を演じる

「ワグ・ザ・ドッグ」などがある。

いずれも、選挙を皮肉一杯でとらえているが、選挙運動の手順はよくわかる。アメリカでも政治の話題は、時に歓迎されないこともある。政治に対して、批判は常に一杯である。「華氏九一一」が有名だが、監督自身が政治に対して不満があるから、皮肉を通り越して政治批判の映画を作ることもある。

しかし、皮肉も笑いもない有権者教育を目的とした映画だったら、誰も見ない。皮肉一杯のコメディ映画は、有権者教育とブラックジョークのパレート最適点に位置する(バランスがとれた)。隠れ有権者教育映画なのだ。日本でも、大笑いしながら、立法や選挙について学んでしまえる映画が登場することを待ち望んでいる。



アメリカの有権者教育 レポート〈第5回〉

法案の書き方を知っていますか！ 立法を学ぶ高校生

前四回は「投票行動」を決定するための訓練を紹介した。今回は、将来議員になりたい高校生のための、教育を紹介しよう。「投票」は、大人になれば誰もが有する権利であるとともに、義務でもある。そのため、「投票」に関連する教育は、広く行われている。それに対し、「議員」になるための教育は、「スペシャル教育」である。ここである「議員になるための教育」とは選挙の方法を教えるのではない。子供たちは、立法から大統領が署名をして法律になるまでの議員の仕事を学ぶことになる。将来議員になりたい高校生が学ぶ「職業紹介・訓練 教育を紹介しよう」。

★エリート高校生がワシントンDCに集合

ワシントンDCの一流ホテルのいずれかは、初冬の四日間、高校生に占領される。ロビーには、背筋を伸ばしてスーツを着こなし、自信に溢れた高校生が、あちこちで談笑する。青春のシンボルのにぎびや、笑顔にはあどけなさが残るが、ここに集まった約一〇〇〇人の高校生たちは、高校を代表する「連邦議員」である。

高校生たちを束ね、「立法教育」を提供するのは、二〇〇人のプリンストン大学の大学

生だ。アインシュタイン博士が在籍したプリンストン大学の学生クラブ、「モデル・コンGRESS（模擬国会）」である。東海岸には名だたる大学が存在し、かつ、ほとんどの大学が「高校生向け模擬国会」を主催する。そのなかでも、特に、質が高いと評判なのが、このプリンストン大学が運営する模擬議会である。オハイオ州、コネチカット州、ニュー・ハンプシャー州、ニューヨーク州、デラウェア州、ニュー・ジャージー州、メリーランド州、バージニア州、ノース・カロライナ州の広い範囲の高校生が参加する。基本的に一つの高校から一〇人前後の高校生が選ばれ、「ディ

横江 公美(よこえ・くみ)

●Profile

1965年、名古屋市生まれ。明治大学経営学部卒。94年に松下政経塾に入塾(15期生)。その間、プリンストン大学客員研究員、ジョージ・ワシントン大学客員研究員として、アメリカ大統領選を中心に世界の選挙の実地研究を行う。VOTEジャパン株式会社社長を経て、現在「PACIFIC21」代表。政策、世論調査、広報戦略に関するコンサルティングを行っている。明治大学非常勤講師。著書に「Eポリティックス」「第五の権力 アメリカのシンクタンク」(以上文春文庫)、「判断力はどうすれば身につくのかーアメリカの有権者教育レポート」(PHP新書)

ベイト」や「現代社会」の先生に引率されてワシントンDCにやってくる。ほとんどの高校が、生徒と先生のDCまでの旅費と四日間の宿泊代、そして、模擬国会の参加費をまかなう。つまり、このプログラムのために、地域やPTAに対して資金集めを行う。模擬国会に参加する高校生は、まさしく高校を代表する「優等生」であり、大学受験の申請書にも、特記事項に書くことになる。

★大統領を選出する

プリンストン・モデル国会では、連邦議会のすべての登場人物が登場する。服装コードは、当然、スーツである。ほとんどの高校生は、上院議員か下院議員として参加するが、〇・三%にあたる約三〇名は、もう一段階難しい役柄を演じる。国務長官や財務長官などの閣僚、六人からなるメディア・チーム(広報担当又はプレス担当)、八人の最高裁判所の裁判官、そして大統領だ。

初日は大統領の選出から始まる。模擬国会



委員会の様子

の大統領は、議会を通過した法案に対して拒否権を発動する権利を持つ。大統領は、通過したすべての法案に目をとおす。拒否権の発動か否かを決めるため、

閣僚会議を開催し、閣僚に意見を聞く。また、大統領は、模擬国会の開催中に、予期せずに起きる模擬国内危機や国際危機に対応したり、それに対して記者会見も行う。

大統領の役を演じるにはリーダーシップの能力が必要である。そのため、大統領役につきたい高校生は事前に立候補する。立候補用紙の内容には、以下の三つを書き込む。一つは、過去の参加した模擬国会の経歴と優秀賞などの賞の受賞歴。二つ目は、大統領という大役をこなすことができることを証明する活動、リサーチ・プロジェクト（期間を決めて集中的に研究を行う研究プロジェクト）などの活動歴。三つ目は、A4用紙二枚以内で約六〇〇単語で、なぜ大統領役を演じたいのかという動機を書く。ここには、大統領役を成功させると思う自分の資質、最も気になる最近の争点、アメリカにおける大統領の役割の三つの内容を含んでいることが要件である。

ほぼ一校につき一人ずつ立候補者がいるの

で、プリンストン大学の学生スタッフが、事前に三人の候補者に絞り込む。そして、模擬国会の初日の午後七時から大統領選挙は始まる。選挙運動期間はモデル・コンGRESの受付開始から会議開始までの、午後一時から六時である。その間に、大統領候補者たちは、初めて会う一〇〇〇人の高校生に対して選挙運動を展開する。午後七時から、一人四分ずつのスピーチを行う。スピーチには、二つ以上の政策を訴えることが要件になっており、一つの政策しか提示していない場合、スピーチ終了とともに、大統領候補者の資格は剥奪される。

スピーチが終わると、約一〇〇〇人の議員たちは、これぞと思う大統領候補者に投票する。ここでの決め手は、自分が書いた法案が本会議で可決された場合、拒否権を発動しないと思われる、つまり、自分と同じ考え方をする大統領に投票することになる。

★テレッサ下院議員の仕事

次は、連邦議員の模擬国会での職務を紹介しよう。初日から三日間は上院、下院ともに、それぞれの委員会で各自が持ち寄った法案について審議する。

委員会は本物さながらに設置されている。下院には、武器委員会、住宅・エネルギー・商業委員会、教育と労働委員会、行革委員会、国際関係委員会、法務委員会、科学と技術委員会が設置され、上院には、銀行業務・住宅・都市問題委員会、環境と公共委員会、国

際関係委員会、健康・教育・労働・年金委員会、法務委員会が設置されている。

それぞれの委員会に参加する議員の数は一人から二〇人程度。司会者はプリンストンの大学生スタッフが勤める。開始と終了時間、そして審議が円滑に進むためだ。引率の教師は、次から次へと自分の生徒が参加する教室を歩き回っている。

「郊外の高校生が、大学に進学する環境の整備が必要です。郊外の高校生の大学進学率は都市部に比べるとかなり低いのが現状です。進学率と比例して犯罪率も高くなっています。二〇%以下の大学進学率しかない地域の生徒には、条件を満たせば、連邦政府が奨学金を与える、という法律が必要です。進学率が上昇すれば、犯罪率も低下していくと思われます。そこで、財源は教育関係ではなく、法務関係の財源から考えます。」

メリーランド州のロック・ラベン高校から参加したテレッサ・ホワイトは、「郊外の高校生の大学進学を奨励する法案」を提示した議員として最初のスピーチを行った。与えられた時間は四分間。知的な雰囲気とかわいさを持つテレッサは原稿も用意していない。原稿もなしで身振りを加えて堂々とスピーチした。

反対スピーチの声がかかると、三人の議員が手を上げた。司会者は、最初に手を上げた男子高校生を指名した。

「大学進学への奨励が、犯罪率低下に、直接結びつく可能性は低いと思います。犯罪率低下が目的であるならば、もっと賢い予算の使

「一方があるのではないかと思えます。」とよどみなく反対意見を述べる。参加した高校生が書いた法案集は、モデル・コンGRESの会場で登録した時に初めて手にする。つまり、反対スピーチは、ほとんど、即興で行われている。反対意見に対する答弁も即興になる。法案は用意するが、当日は、即興対即興の戦いになる。

続いて、条項に関する議論に移行する。ここでは、奨学金を受け取る学生の条件に議論が集中した。結果は、教師が推薦書を書き成績表が平均二・五以上の高校生が対象になる、という修正条項つきで三分の二の賛成票を集めた。テレッサの法案は司法委員会を通し、最終日には、本会議場の議題にのぼることになった。

最終日、テレッサは一二五人が参加する本会議で、堂々と四分スピーチで法案の必要性を力説した。委員会の時と同じように議論は沸騰した。反対スピーチにも賛成スピーチにも一斉に手が上がる。結果は六一対六四で法案は否決されたが、テレッサは「いい経験だった」と笑顔を見せる。委員会と本会議を通して新しい友達もできた。

★模擬国会の準備

高校生が四日間連邦議員を演じるためには、かなりの準備が必要になる。プリンストン大学は、前もってどんな委員会があるのか、それぞれの委員会で議論されるテーマは何か、法案の書き方、連邦議員の職務、そして

模擬国会の手順、つまり委員会の審議の方法、本会議の審議の方法などの資料集を提供する。

高校生と教師は丸となって、それらの情報を使って法案を書くことになる。概して、高校では、模擬国会の準備に少なくとも一カ月をあてる。

NY州のロングウッド高校の例を紹介しよう。ここでは、参加する生徒を二カ月ほど前に決定する。練習の初日は、それぞれの高校生に、参加したい委員会を選ばせることになる。ロングウッド高校では、二人の高校生が同じテーマに手を上げた場合、コインを投げて決めることになっている。この高校では、世相を反映し、科学と技術、そして国際問題に関連する委員会に人が集中した。

それぞれのテーマが決まると、三週間ほどリサーチして、法案を書くことになる。最初は、問題意識に関する情報収集から始め、そして、その問題に関してすでに存在する法律



本会議の様子

の調査、解決策となる法案を考案、そして法案の形にするために必要な情報収集と続く。

法案のサンブルと詳しい内容はプリンストン大学から提供されて

いる。そこでは、法案は序文、本体、最終章の三つの項目からなる事が要求されている。序文では、なぜ、この法案が必要なのかを書くことになる。なぜ、政府によって解決策が提示されなければならないかを書く。そして、書き出しは、…であるがゆえに(Whereas…)で始めなければならない。そして、具体的な解決策の提示が求められる。解決策はいくつでも良い。それぞれの解決策には、小項目をつけ、さらに詳しい策を書くこともできる。そして、最後の行には、この法案が通過した場合、何時から有効になるかを書かなければならない。

法案作りが終わると、次は、ディベートの練習に移る。模擬国会のルールどおりにディベートの練習を行う。この時には、どんな反論が来るのか、どんな支持を受けることができるのか、をシミュレーションする。どんな場合でも、きちんと討論することができるという自信をつけさせるためだ。

モデル・コンGRESに参加する高校生は、自分が書いた法案説明において、原稿を見てスピーチするものは皆無である。アドリブの応酬となる法案についてのディベートでは、手が上がらないこともなければ、意見を話しているうちに、つまってしまうこともない。

議員という職は、役割が大きい、その職務に対する教育は、日本では、全く行われていない。こういった教育は「エリート教育」の色彩があるだけに、反感を抱く人もあるかもしれない。だが、国会の質を高めるためには必要不可欠な教育ではないだろうか。